

護國の經典と興禪の意義

伊藤古鑑

佛教に於て、護國の經典と云はれて居るものは少なくないが、その中に於ても、特に有名なもの
は「護國の三經」と云はれて居るものであらう。即ち護國の三經と云ふのは、法華經と金光明經と
仁王般若經との三經を指したものであるが、その中、法華經は一般の人に良く知られ、護國の經典
と云ふよりも、寧ろ天台宗、日蓮宗の所依の經典として、その教義の中心をなして居る點に於て、
特に有名であるやうに思ふ。

金光明經と仁王般若經とは、その中に護國品と云ふ一品があつて、特に護國思想が説いてあるの
で、我が國では早くから此等の經典を講讀せられて居たやうである。その他、守護國界主經とか大
乘理趣六波羅蜜經とかには護國の法が説いてある。また眞言密教には種々なる護國の儀軌を傳へ、
法華經法、仁王經法、理趣經法、守護經法などがあつて、護國の法を委しく説いて居る。禪宗でも
大般若經轉讀、般若理趣分眞讀は申すに及ばず、大悲咒も、尊勝陀羅尼も、消災咒も、みんな護國

の經典であり、これを眞讀するのが護國の法なのであらう。また廣い意味で云へば、有らゆる經典全部が護國の經典でないものは一としてないと云はねばならぬ。が、しかし今は、それ等のことには、あまり言及せずに、唯だ簡單に護國の三經のみに就て述べ、終りに禪宗の立場から興禪護國の意義を少しく附け加へたいと思つてゐるのである。

二

先づ法華經八卷が護國の經典と云はれて居る點から述べて見よう。法華經は云ふまでもなく諸法實相の經典であつて、一切諸法は有るべくして有るものと肯定し、有るべからずして有るものは一としてないと主張するのである。即ち、この世間の治世産業も正法であると云ひ、「是の法、法位に住す、世間相常住」と云へるが如き經文は、あまりにも有名な言葉であるが、しかし今、これが護國の經典として法華經を用ふるのは、寧ろ滅罪生善の意味からであらうと思ふ。殊に此の法華經に於ける女人成佛の思想が非常に開發せられ、女性の手によつても、この經を大に宣揚せられたやうに思はれる。

この法華經に於ける滅罪生善の經文を擧げるならば、藥草喻品、安樂行品、藥王品に、それ等ことが明かに説かれてゐる。

爾の時、無數千萬億種の衆生、佛所に來至して法を聽く。如來、時に是の衆生の諸根の利鈍と、

精進懈怠とを觀て、其の堪ゆる所に隨つて、爲めに法を説くこと種々無量にして、皆、歡喜して快く善利を得せしむ。是の諸の衆生、是の法を聞き已つて、現世は安穩にして、後には善處に生じ、道を以て樂を受け、亦、法を聞くを得、既に法を聞き已つて、諸の障礙を離れ、諸法の中に於て、力の能くする所に任せて、漸く道に入るを得。(藥草喻品)

是の經を讀む者、常に憂惱なく、又病痛なく、顔色鮮白にして、貧窮卑賤醜陋に生ぜず、衆生の見るを樂はんこと、賢聖を慕ふが如し、天の諸の童子、以て給使をせん、刀杖も加へず、毒も害すること能はず、若し人惡罵せば、口則ち閉塞せん、遊行するに畏れなきこと師子王の如く、智慧光明、日の照らすが如けん。(安樂行品)

此の經は則ち閻浮提の人の病藥たり、若し人、病あつて是の經を聞くことを得ば、病即ち消滅して、不老不死ならん。(藥王品)

また、女人成佛の思想と云ふのは、提婆達多品に、娑竭羅龍王の女、年始めて八歳なるものが、忽ちに變成男子して菩薩行を具し、南方無垢世界に、寶蓮華に坐して成佛し、普ねく一切衆生の爲に妙法を演説したと説いてあるので、これを常に「龍女成佛」の經文と云ひ、釋尊御一代の經典、その數多しと雖も、現世に女人の即身成佛を説けることは、蓋し此の法華經を以て、最も異彩を放つ點と見て良からうと思ふ。この龍女成佛に就ては、教義的に研究すれば、そこに多種多方面の問

題があるのであるが、兎に角、八歳の龍女、女身にして、しかも畜類のものが、忽然として無上菩提を得たと云ふことは、如何に此の經の因圓果滿の妙理を、如實に顯はしたものと見ることが出来るのであらう。

また觀世音菩薩普門品に於ても、三十三身十九の説法を示し、特に觀音の無縁の慈悲を以て、女人の眞の姿なりと見、それを高調した女性さへある。また普門品の中の二求兩願章の如きは、女性の信仰から云つて、大に光つてゐる經文と云はねばならぬ。

三

さて、この法華經を日本で第一に講讚せられたのは聖德太子で、推古帝十四年（皇紀一二六六）に講讚し給ひ、且つその註疏たる法華經義疏を同二十二年（皇紀一二七四）に御製作し始め、その翌年に至りて完成し給ひ、維摩經、勝鬘經の註疏と共に、聖德太子の三註疏として現存し、大に世の賞讚するところとなつて居るのである。

次に、この聖德太子已後、特に有名なことは、聖武天皇の天平六年（皇紀一三九四）には、法華經は金光明經と共に、僧を度するときの試目に用ひられ、また同じく十三年（皇紀一四〇一）には諸國に國分寺を置かれたことである。即ち比丘寺を「金光明四天王護國之寺」と云ひ、比丘尼寺を「法華滅罪之寺」と云ふやうになつたと傳へられて居るが、この比丘尼寺を法華滅罪之寺とか、或

は法華寺とか云ふのは、女性に法華經を讀ましめ、五障等の重罪を滅し、二世の安樂を得せしめん爲めの意味ではなかつたらうか。

この國分寺設置に關しては、種々に述べなければならぬ重要事項もあるが、要するに續日本紀第十四、聖武天皇天平十三年三月の條に、國分寺創立の詔書を掲げて居る。その中に、

宜しく天下の諸國をして各敬で七重の塔一區を造り、並に金光明最勝王經、妙法蓮華經各十部を寫さしむべし。朕又別に擬して金字の金光明最勝王經を寫して、塔毎に各一部を置かしむ。冀ふ所は聖法の盛なること、天地と與に永く流へ、擁護の恩は幽明に被りて、恒に満たんことを。

と仰せられて居る。即ち金光明最勝王經の御徳に由つて、護國の四天王、及び其の眷屬の守護を蒙り、以て怨敵を降伏し、諸の災變を穰ひ、疾疫を除滅して、國土を安穩ならしめんと爲と拜察することが出来る。また法華經の功徳に由つて、女人の五障等を滅し、以て二世の安樂を獲せしめんとの意味で、特に光明皇后のお勧めによつたものとも傳へられて居る。

かくの如く國分寺建立に依つて、金光明經と法華經とは盛んに講讚せらるゝに至つたのであるがもとより、それ以前に於ても、この二經は講讚せられ、また仁王般若經も講讚せられてゐたやうである。即ち齊明天皇の六年五月（皇紀一三二〇）には仁王般若會を設けられ、天武天皇の白鳳四年十一月（皇紀一三三六）には使を四方に遣はして、仁王般若經と金光明經とを講ぜしめ給ひ、同じ

く白鳳八年（皇紀一三四〇）には金光明經を宮中及び諸寺に講ぜしめ給ひ、持統天皇の朱鳥七年（皇紀一三四六）には仁王般若經と金光明經とを講ぜしめ給ひて恒例となし、その翌年五月には金光明經一百部を諸國に頒ち與へ、それから已後も、この仁王般若經と金光明經との講讚、寫經頒布と云つたやうなことが非常に盛んに行はれ、終に聖武天皇の時代になつて國分寺建立と云ふことになり、こゝに鎮護國家の爲めに、講經、寫經、奉禱と云ふやうなことになつたものであらうと思ふ。

四

次に、この金光明經は、仁王般若經と同じやうに護國品の一品が特にあつて、そのところに護國思想が説かれて居る。仁王般若經は嘗て此の誌上で述べたことがあるから略して、こゝに金光明經のみに就て述べるならば、この金光明經には、五回の全譯と五回の部分譯とがあると云ふけれども一般に行はれて居るのは、最も古い北涼の曇無讖三藏翻譯の金光明經四卷である。これには天台大師、嘉祥大師の有名な註釋があり、天台五小部の隨一たる金光明玄義、金光明經疏があつて、これ等の研究は、趙宋時代に、山家山外の論争の中心にもなつて盛んに行はれたのである。また行軌としては、天台大師の金光明懺法があり、四明大師、遵式法師及び傳教大師にも金光明講式がある。

また金光明經の最後の翻譯と云はれて居る唐の義淨三藏の金光明最勝王經十卷があつて、この經は非常に完備したものと云はれ、日本に於ては特に最勝王經と云ひ、大に講讚せられ、弘法大師に

は開題一卷あり、常騰法師、願曉法師にも各十卷づゝの末釋がある。

この經に説かれて居る護國思想は、この經第二卷に四天王品があり、義淨譯では四天王護國品と云ひ、護世護國の王たる四天王が釋尊に誓ふて、この經を受持するものには、それ等を護念し恭敬すると云ひ、人天の王たるべきものは、この經を受持して、國利民福を計らねばならぬと云ふことが説いてある。今、その經文の一節を擧げるならば、

世尊、是の金光明微妙の經典は衆經の王にして、諸佛世尊の護念したまふ所なり。菩薩深妙の功德を莊嚴し、常に諸天の爲めに恭敬せられ、能く天王をして心に歡喜を生ぜしむ。亦た護世の爲めに讚歎せらる。此の經は能く諸天の宮殿を照らし、是の經は能く衆生の快樂を與ふ。是の經は能く地獄餓鬼畜生の諸河をして焦乾枯竭せしむ。是の經は能く一切の怖畏を除く、是の經は能く他方の怨賊を滅す。是の經は能く穀貴饑饉を除く、是の經は能く一切の疫病を愈す。是の經は能く惡星變異を滅す。是の經は能く一切の憂惱を除く。

と云ひ、この金光明微妙の經典を聽受し、歡喜し、供養恭敬、尊重讚歎するやうに説かれて居る。然らば、この金光明微妙の經典とは何ぞやと云ふに、天台大師は、

法性眞如の理の諸佛の師として最も尊貴なるを金と云ひ、この理一切のものを照して昧き所なきを光と云ひ、この理總べての物に應じて、遍く利益するを明と云へるものなり。

と云ひ、法性眞如の徳を三方面から見て、金と光と明との三字を經名としたと説き、更に天台の立場から、ごゝに三身、三徳、三佛性等の喩顯なりと見、委しく法性眞如のことが述べられて居るが、要するに佛陀の體驗し給ふ法性眞如の正法を金光明微妙の經典と云ふたものである。故に、この經文にも、

世尊、我等四王、能く正法を説き、正法を修行し、世の法王と爲つて、法を以て世を治めん。

と云ひ、この金光明經の正論品には王法の正論を説いて、治國の要道を示し、その實例として善集品には、正法護持者を擧げて居るやうであるが、これは嘗て私が仁王般若經の研究にも説いた如く仁王が護國、護國は般若に依ると云つたやうに、この金光明經では、法性眞如の正法を受持し讀誦し、如説修行するときは佛菩薩を始め諸天善神の擁護を受け、必らず自他一切が金光明生活に入り、國家安穩、天下泰平であると示したのである。

五

そこで、我が佛教に於ける護國思想を要約して見ると、「正法の存するところ、國家は安穩に治まり、永遠に榮ゆべし」と云つたやうなことになるので、その正法が其の經典に依つて名を異にし、或は般若と云ひ、或は金光明と云ひ、或は眞如とか實相とか云ふて居るけれども、その眞實の體に至つては同じものであると云はねばならぬ。然らば、その正法の體とは、どんなものであるかと云

ふに、決して正法と云はるべき固定した體があるのではなく、こゝのところを特に明瞭に擧揚して居るのは禪宗の本領であつて、興禪護國の要諦も、この正法の實體を體得するに外ならぬものと思ふ。即ち榮西禪師の興禪護國論にも、

問ふて曰く、或る人難じて云く、何故ぞ禪宗獨り鎮護國家の法たるや。答へて曰く、四十二章經に云く、爾の時世尊、既に成道し已つて是の思惟を作し給ふ。離欲寂靜是れを最も勝れたりと爲し、大禪定に住して諸の魔道を降し、法輪を轉じて衆生を度すと。遺教經に云く、此の戒に依因すれば、諸の禪定及び滅苦の智慧を生ずることを得と。是に知んぬ、禪力に非ずんば一切の惡破し難きことを、仍つて此の宗を以て鎮護の主要と爲るのみ。

と云はれて居るが、この禪力と云ふことが鎮護國家の力となるもので、これを國王も國民も實際に我が身に體得してこそ、正法は有り、正論は行はれ、善く國土は治まり、國家を鎮護することが出来ることと云ふのである。而して、その禪力とは如何なるものかと云ふに、これも決して、禪力と云ふ一法が別に存在すると云ふのではなく、一言にして云へば無我の力、自己を空しうする力であつて、四十二章經には、無念無住無修無證と云ふて居るが、この無念無住のものゝ發得せる不可思議自在の禪定力である。仁王般若經には、この力を法眼空とか、虚空等定とか、三空門定とか云ふて居るが、この虚空に等しき定力、眼中更に何物もなき大禪定が、こゝに云ふ正法の實體であり、正論の

根幹であらうと思ふ。故に仁王般若經にも觀空品あり、金光明經にも同じく般若の空思想に依つて全經が説かれ、また空品の一品さへ加へられて居るが、この無我無心、無住無念、自己を空しうして國家を鎮護すると云ふ大精神に生きてこそ、眞實の禪定力と呼ばれ、そこに必らず正法は宣布せられ、禪は大に興隆されて居ると云ふべきであらう。

この無我無心、無住無念、自己を空しうすると云ふことは、常に禪宗の祖師に依つて高唱せられ、宗旨の根柢も自己を空しうするにあるので、達磨大師の「廓然無聖」と云ひ、六祖大師の「本來無一物」と云ひ、黃檗禪師の「無心是道」と云ひ、また臨濟大師の「無依の道人」と云ひ、みな同じく無我無心、無住無念の本體を指示せられたものと云ふことが出來やう。

六

しかし、我が禪宗に云ふ無我無心と云ふことは、素より死灰に等しき無我無心と云ふ意味ではなく、そこに本來の立場たる有我有心が顯はれ、物に應じ、機に觸れて自由自在に、その全體が躍動するので、臨濟大師も、「無形無相、無根無本、無住處にして活潑潑地なり」と獅子吼せられて居るが、この無住處の根本を擱んで始めて、國家に御奉々せば、必らず盡忠報國の大精神に契ふことが出來るものと信するのである。而して此處に盡忠報國に就て、その忠に對する心構へを近代の白隱禪師などの巨匠の言葉から引用して見やう。

忠と云ふ字を能く見れば、外へちらさぬ此の心、五尺餘のからだは持てど、主心なければ小童ちや、武藝武術も第二の沙汰よ、兎角主心が主ちやもの、主心なければ明屋も同じ。(白隱禪師、粉引歌)

忠を盡すと云ふは、先づ我心を正しく、身を治め、毛頭君に二心なく、人を恨み咎めず、日々に出任怠らす——兵術の心正しければ、一心の働自在にして、數千の敵をも一劍に隨ゆるが如し、これ大忠にあらずや。(澤庵禪師、不動智神妙錄)

親のうみ付ざる身のひいきなる心をもたぬやうに、嗜まつしやれ、奉公つとめらるゝ衆は、男女とも主人へ一身をなげて勤められ、我身に少しも最負なく、奉公致さるゝが、第一のつとめで御座る、別して主君へ忠をつくしまするが、則親への孝で御座る——親の我を産みたるときは、此身にひいきする心は少しもない物で御座るが、成人いたしあしくそだちて、此ひいきといふ物が出来たもので御座る、其おこらぬ所が則不生で御ざらぬか、其不生と申が、佛心で御座る。(正眼國師、假名法語)

以上に於ける主心とか、不生の佛心とか、或は澤庵禪師の言はるゝ不動智とかは、みな共に我が禪宗に云ふ無我無心の當體であつて、物に應じ、機に觸れて殺活自在に顯はるゝ全機現であり、全現成である。常に我が禪宗では否定の言句を多く使用して、無心とか無念とか廓然無聖とか、一無

位の眞人とか云ふけれども、そこに大に有心であり有聖であり、一有位の眞人あることを道取して、それが眞個に、活き／＼として躍動してゐると云ふことを忘れてはならぬ。機に臨んで、全體が作用するから、そこに眞の滅私奉公が出来るので、これ偏へに禪力の致すところと見るべきである。

尙ほ禪宗に用ゆる經典として、特に金剛般若經の如きが、日本に於ても鎮護國家の祈禱の經典として用ひられた事實、及び祈禱に對する我が宗の考へなど述べたきも、今は餘りに長文となりしゆへ、こゝに略す。

人と生れたらむ思ひ出に、義をおもくして一命をかるんじ、己れにはなれて、まことの道に入るべし、(中畧)かへす／＼あやまる事なく、萬事を放下して忠孝のみちに入るべし。(中畧)十二時中つとめて己れにはなれ、まことの道に入るべし。まことはさらに邪なし、まことの人はずだ無事の人なり。

(盲 安 杖)